

疑われたロイヤルウエディング

国王

ディーシアル王国
国王。

イザベラ

ディーシアル王国の
第二妃。王の寵愛を
一身に受ける美女。

ローリエ

ディーシアル王国の
正妃。公爵家出身で
プライドが高い。

レオン

ディーシアルの第二王子。
二十四歳。第二妃の息子。
賭場に入り浸り、国政には
関わっていない。

サリア

アンリエッタの有能な侍女。
主思いのしっかり者。

オーランド

大国ディーシアルの第一王子。
二十四歳。正妃の息子。
誰もが認める真面目で優秀な
王子だったが、一年前から
生活が荒れている。

アンリエッタ

小国フィノーの第二女王。
十七歳。三年前、自分を救っ
てくれたオーランドに恋をして、
ずっと思い続けてきた。
明るく前向きな少女。

プロローグ

その年、北の小国フィノーは未曾有の危機に瀕していた。

「陛下、国王陛下！ お気を確かに！」

「早く医師を！ 王妃殿下の様子も思わしくないようだ」

「国王様っ！」

多くの悲鳴と足音、混乱と恐怖が行き来する中、フィノー王国の第二王女アンリエッタは、真つ青になって立ち尽くしていた。

「お、お父様！」

足下から凍りつくような恐怖を感じつつ、すぐに父のもとへ駆け寄ろうとしたアンリエッタは、老齢の宰相に引き留められる。

「いけません、アンリエッタ様！ お近づきになつては……！」

苦しげな表情で肩を掴んでくる宰相に、アンリエッタは涙目になりながら唇を震わせた。

今、この国は原因不明の病に侵されていた。

国中の人々が得体の知れない病にかかり、ろくな治療も受けられぬまま次々に倒れていく。

その猛威はどうとう王都にまでおよんだ。アンリエッタは迫りくる病から逃れるために、王家の人々とともにこの離宮へやってきたばかりだったのだ。

(それなのに、お父様やお母様まで病にかかってしまうなんて——！)

受け入れがたい現実には、アンリエッタはぼろぼろと涙をこぼす。

そんな彼女を、宰相は王族の寝所からもっとも遠い部屋へと移し、厳しい表情で言った。

「このまま国王様やお世継ぎ様、また先に倒れられた王族の方々に万一のことがあつたなら、この国を背負っていかれるのはアンリエッタ様となります」

アンリエッタは鋭く息を呑む。

「……いやよ、そんなことを言わないで！ お父様たちは必ずよくなるわ。わたしが国を背負うことになるなんて、そんなことは起こらないわよ！」

悲しみと衝撃、なにより背負うことになるかもしれない責務の大きさにすっかり怖くなって、アンリエッタはわつと声を上げて泣き出してしまふ。

そんな彼女を痛ましがな目で見つめつつ、宰相は忠臣として言葉を重ねた。

「もはや王族で病にかかっていけないのはあなた様だけ。こうなつてしまつた以上、なんとしても健康を維持していただかなければなりません。国王様を始め、罹患者は全員隔離しておりますが、万一のこともございます。このお部屋から一步も出ないように」

「いやよ、いやっ！ お父様のそばに行かせて……！」

「我が儘をおっしゃいますな！ 王族の姫君が、そのように取り乱すことは許されません」

そうは言つても、アンリエッタはまだ十四歳。子供ではないが、大人とも呼べない年齢だ。多感な少女にとつて、両親を含め近い人々が病に冒おかされている現実には恐ろしいものではない。

まして国を背負うなど想像もできないほどの重責だ。アンリエッタは宰相が出て行つたあとも声を上げて泣き続けた。

そうしてどれくらい経つただろう。疲れきつた彼女は、窓辺に膝を抱えてうずくまっていた。

(……本当にこのまま、お父様たちが回復なさらなかつたら……)

宰相の言うとおり、未だ健康な自分が王位を受け継ぎ、国を治めることになる。

そんなことが果たしてできるのだろうか。王女としての教養は一通り身につけたが、政治のことなどひとつもわからない。助力してくれるはずの重臣たちもすでに多くが病に冒され、今は無事である人々もいつ倒れるかわからない状態なのだ。

そんな中で王位に就くなどできるはずがない。それ以前に、大好きな両親や従弟いとこたちが助からなかつたらと思うだけで、足下が崩れるような恐怖に見舞われる。

(このまま、わたしひとりだけが取り残されるようなことになつたら……)

ほんの少し考えただけで、目の前が真っ暗になるような絶望感に襲われた。アンリエッタは喉を震わせ、我が身をかき抱いてすすり泣く。

そのとき——

小さなノックとともに、ギイ、と遠くで扉が開く音が響いた。誰かが食事を持ってきたのだろう。この部屋に隔離されてから、身支度と食事のときだけ侍女が訪れるようになっていた。

食欲などとうに失せているアンリエッタは、ますます身を縮めて侍女が立ち去るのを待った。しかし、こちらへ近づいてくる足音は侍女のものにしては心なし大きいような気がした。

涙で滲んだアンリエッタの視界に、男物の革靴が映り込む。驚いてかすかに目を見開くと、頭上から優しく声がかけられた。

「あなたが、フィノーの王女殿下か？ 王族で唯一無事だという」

耳に心地よい、若い男性の声だった。

おやおすと顔を上げると、こちらを見つめる瞳とかち合った。

寶石のように透き通った、美しい紫色の瞳だった。その目元にかかる前髪は栗色で、男らしい顔のラインを覆っている。今はわずかに身をかがめているが、背を伸ばせば小柄なアンリエッタよりずつと長身であることはすぐにわかった。

「あなたは……」

泣きすぎてかすれた声でアンリエッタは呟く。そのあいだも視線は目の前の青年に釘付けになったままだ。見慣れない人物の登場に驚いたこともあったが、一目見ただけで、心を掴まれるような不思議な感覚に包まれていた。

青年はうずくまるアンリエッタに視線を合わせるように、静かに片膝をついた。

「わたしはディーシアル王国の第一王子で、オーランドと言う」

「ディーシアルの王子様……？」

隣国の王子を名乗った青年を前に、アンリエッタは反射的に居住まいを正そうとする。だが続く

彼の言葉を聞いて、礼儀作法はすぐに頭から吹き飛んだ。

「数日前、あなたの父上から我が国に助けを求めめる書状が届いたんだ。まさか病がここまで広がっているとは思わず、くるのが遅れてすまなかった」

軽く頭を下げるオーランド王子を前に、恐怖と悲しみが一気に戻ってくる。アンリエッタは思わず王子の腕にすがりついた。

「お願いです、父を助けて下さい……！ 母も従弟も叔父も、みんな病にかかつて苦しんでいます。熱が出てからも二日は経っています。今夜熱が引かなかつたらお父様たちは……っ」

その続きはとても口にはできなくて、アンリエッタは嗚咽を漏らす。

そんな彼女の肩をそつと撫でて、オーランドはしっかりと声で答えた。

「大丈夫、安心なさい。この国に蔓延している病は、かつて我が国でも猛威を振るったものだ。今は研究が進んで特効薬もできている。わたしに同行した医師たちが、すでに王家の方々へ薬を投与した。じきに全員熱が下がって、元気になるだろう」

絶望に沈みかけていたアンリエッタは、力強いその言葉にハッと顔を上げた。

「ほ、本当に……？」

呆然と見上げてくるアンリエッタの手をしっかりと握って、オーランドは頷いた。

「本当だ。医師たちも口をそろえて大丈夫だと請け負った。もう安心していい」

「で、でも、お父様、あんなに苦しんでいらして……。それに、世継ぎの従弟はまだ五歳で……あなたの子が一番に熱を出したんです。まだ小さいし、もしなにかあつたら」

皆が倒れたときの様子を見ていただけに、アンリエッタはそう簡単に信じる事ができない。

小刻みに震える彼女をオーランドは痛ましげに見つめていたが、細い肩をおもむろに引き寄せると、小さな身体を腕の中にすっぽりと閉じ込めた。

男のひとの力強い腕とぬくもりを全身で感じて、アンリエッタはどきりとする。緊張で身体が強く張るが、大きな手が髪を撫でていくのを感じると、ゆるゆると力が抜けていった。

「もし万が一のことが起きたとしても、あなたは決してひとりにはならない。同盟国の王子として、わたしがあなたをいつでも助けると約束しよう」

——ひとりにはならない。

その一言が、不思議なくらいアンリエッタの胸に響く。

悲しみに覆われていた心に光が差して、喉元に熱い塊が込み上げてきた。涙腺が緩んで、再び涙がこぼれてくる。だがその涙は、それまで流していたものとはまったく違うものだった。

はらはらと泣くアンリエッタを柔らかく抱きしめ、隣国の王子はしみじみと呟く。

「つらかったな。たったひとりで家族を失うかもしれない恐怖に耐えて……。もう大丈夫だから、安心しなさい。よく頑張ったな」

そうして優しく背を叩かれると、こらえていたものが堰を切つてあふれてきて、もう止められなくなってしまう。

アンリエッタは顔をくしゃくしゃにして、オーランドの胸に抱きついた。彼はずっとアンリエッタを抱きしめ、嗚咽おえうが小さくなるまで優しく髪を撫でてくれた。

——そうして疲れ切って、いつの間にか眠ってしまったて……

目が覚めたときには、隣国の王子様はもう離宮を離れていた。

オーランド王子はこの離宮だけでなく、多くの患者に救いの手をさしのべてくれた。

国王を始め王族は全員一命を取り留め、世継ぎの従弟も二週間後には庭を駆け回れるくらいに元気になった。

——彼が訪れるのがあと少しでも遅かったら。

それを考えると、身体の芯から震え上がらずにはいられない。

と同時に、優しい言葉と力強い抱擁ほうようでアンリエッタを救ってくれた彼を思うと、胸の奥がとくとくと速い鼓動を刻んで、落ち着かない気持ちになるのだ。

時折聞こえてくる隣国でのオーランドの働きを耳にするたび、その気持ちはどんどん大きくなって、彼のことを思う日が増えていった。

彼の姿を思い描くたび、喜びと恥ずかしさで身体中が熱くなる。またお会いしたいという気持ちが際限なく膨らんでいき、止められなくなった。

胸を満たすこの甘やかで苦しい思いが、恋というものだと思いつくまでに、時間はかからなかった。その出来事から三年経ったある日——

晴れて十七歳となったフィノー王国の第二王女アンリエッタは、オーランドの母国であるデューシアル王国に求められ、愛するひとのもとへ嫁ぐこととなったのである。

「夫婦になったからと言って束縛はしない。もちろん、されるつもりも毛頭ない。おれは自由や
るから、おまえもこの先、好きに生きていけばいい」

部屋に入ってきてすぐ、冷たく言い放たれた言葉に、アンリエッタはあんぐりと口を開ける。
結婚式のあいだ中、ずっと感じていた羞恥心や緊張はすぐさま吹き飛び、代わりに多大な混乱と
戸惑いが押し寄せてきた。

(好きに生きていけばいいって……どうということなの?)

少なくとも、それが数時間前に神様の前で永遠を誓い、これから初夜を迎える花嫁に向かって夫
が言う言葉なのだろうか?

——そう、アンリエッタは今日、目の前にたたずむ青年と結婚式を挙げたばかりだ。

ディーシアル王国の第一王子であるオーランドは、三年前アンリエッタを救ってくれた恩人であ
り、今日まで一途に思い続けてきた初恋の相手でもある。

大国ディーシアルの王子と、隣国とはいえ小国の姫である自分が結ばれる可能性は低いだろうと
思っていたが……どんな運命の巡り合わせか、こうして夫婦になることができた。

彼に会ったら、三年前の感謝と自分の思いを伝えて、仲睦まじい関係を築いていきたいと思って

いたのだ。それなのに——

(これからよろしくお願いしますとも伝えられないうちから、こんなことを言われるなんて)

本来なら屈辱を感じてもいいところだろう。だが、彼を慕い続けてきたアンリエッタが一番に感
じたのは、拒絶されたことへの悲しみだった。

愛するひととの生活に早くも暗雲がたちこめている。アンリエッタは一度奥歯を噛みしめ、勇気
を出して顔を上げた。

「わたしはあなたと、仲睦まじい夫婦になりたいと思ってこちらに嫁いできました。どうか、そん
な悲しいことはおっしゃらないでください」

しかし、寝台の柱にもたれかかっていたオーランドは、ハッ、と相手を小馬鹿にするような顔で
せせら笑った。

「おまえがなんと言おうとおれの考えは変わらない。そもそも政略で結ばれた相手に、なぜ愛情な
ど持てるんだ? 既婚者が余所に愛人を作るなどよくある話だ。おまえもそれに倣え(なま)ばいい」

さらに信じられない言葉を重ねられ、アンリエッタは衝撃に息を詰まらせた。

「それ、は、つまり……不貞を働いてもよいということなのですか?」

自分で尋ねながらも、信じがたい思いでいっぱいになる。

確かに王侯貴族のあいだでは愛人を持つことは当然の楽しみかもしれないが、この三年間オーラ
ンドだけを思ってきたアンリエッタに、二心(ふたごころ)などあるはずがない。

だがそこで唐突に気付く。彼はそれを知らないのだということに。

(最初にお会いしたときから三年も経っているのだもの。オーランド様は、わたしがあのときの王女とは気づいていないのかもしれないわ)

それならば、とアンリエッタは沈みこみそうになった気持ちで奮い立たせた。

「わたしは、ずっと前からあなたをお慕いしておりました。こうして神様の前で永遠を誓った以上、妻としてあなたに寄り添う努力をしていきたいのです」

だから好きにしたいなどと言わないでほしい。わたしはあなたと愛し合いたい。

そんな真摯な思いをまなざしに込めて見つめるが——返ってきた答えは思いも寄らぬものだった。「……そうやって、おれのことをたらし込めと吹き込まれているのか？」

「え？」

オーランドの地を這うような低い声に、アンリエッタは目を見開く。

(たらし込む……？ どういう意味なの？)

だがそれを問う前に、大腿で近寄ってきたオーランドに腕を取られ、強い力で引つ張られた。

「きゃっ……！」

振り回されるように寝台へ放り投げられ、アンリエッタの細い身体が敷布の上に投げ出される。

突然のことに身体を硬くすると、オーランドが上に乗り上げてくるのはほぼ同時だった。

「オ、オーランド様……っ？」

「気安く呼ぶな、反吐が出る」

これまでにないほど冷たい声音で言われ、アンリエッタは凍りついた。

「ひとが親切に逃げ道を用意してやったというのに、愚かな女だ。いいか、二度とそんな言葉を口にするな」

「そ、そんな……」

愛するひとに愛していると言っではいけないというのだろうか？

反論しようにも強い力で肩を押さえつけられ、込み上げる恐怖に言葉が出なくなる。

それでも、なんとかわかってほしくて、アンリエッタは涙をこらえて言い募った。

「わたし、あなたをお慕いしているのです。本当に……」

ビリビリッ、と布が裂ける音が響いて言葉が掻き消される。

胸元が急に涼しくなったのを感じて、アンリエッタは息を呑んだ。慌てて身体を見下ろしてみれば、初夜のためにあつらえた純白の夜着が、襟元から腰まで一気に引き裂かれている。

「いやっ……」

とっさに胸元を隠したアンリエッタの視界に、引きちぎった夜着の残骸を放り投げるオーランドが映った。

「な、なにをなさるのですか……!?!」

「なにを、だど？ ——おまえが望むとおりにしてやるだけだ」

「ひっ……！」

怒りを孕んだ低い声に、アンリエッタはぞっと背筋を凍らせる。

次の瞬間、オーランドの手が剥き出しの乳房を覆い、膨らみをきつく掴んできた。

「っ！ い、や……！」

太い指が柔肌に食い込む。そのまま荒々しく揉まれ、ヒリヒリとした痛みが全身を萎縮させた。

「い、痛いですが、やめて……！」

「痛い？ そう強く揉んでいるつもりはないが？ だが膨らみが乏しいから、せつかくの愛撫も痛みとしてしか感じないのかもしれないな」

「うっ……」

「年は、確か十七だったか？ その割に貧相な身体つきだ。これでは楽しみも半減するな」
ため息とともに嘲られ、アンリエッタの瞳がたちまち潤む。

自分の身体が女性としての魅力に乏しいことは言われなくてもわかっていたが、愛するひとからはつきりけなされるのは、やはりつらいことに違いなかった。

「う、うああ……っ」

しかしけなしながらも、オーランドは両手でアンリエッタの小さな乳房を捏ね回す。強い力でぎゅうぎゅうと刺激され続け、いつしか白い肌には指が食い込んだ赤い痕が浮かび上がっていた。痛みのせいか息も苦しくなってきた、アンリエッタはうめきながら必死にオーランドの手を離そうともがく。

「お、お願い……、も、やめて……っ」

「膨らみをいじられるのはいやか？ なら、こっちは？」

「ひんっ！」

刺激されたせいで、わずかに色づいた小さな乳首をぎゅっつとつままれ、アンリエッタはびくんと身体を跳ね上げた。

「い、いやっ、そこも痛い、から……！」

「その割には、こうしてつまめるほど硬くなっているようだが？ 捌られて感じるとは、とんだ好き者だな」

「そ、そんな……違います……っ」

アンリエッタは首を打ち振るが、つままれた乳首を強めに引っ張られうめいてしまう。

「やああ……！ 痛いっ、やめてえ……っ」

涙を浮かべて懇願するが、オーランドの手は止まらない。

再び乳房を握りつぶすように揉みながら、今度はアンリエッタの喉へ唇を寄せる。苦悶に震える白い喉に、嘔みつくように歯を立てられて、アンリエッタは悲鳴を上げた。

（いや、いや、怖い……っ！）

身体中ががくがく震える。愛するひとにふれられているのに、わき上がるのは恐怖と緊張ばかりだ。次第にアンリエッタの息もはっつと浅いものになっていた。

「あ、あぁうー！」

再び乳首を引っ張られると同時に、鎖骨のあたりに歯を立てられる。ビリッと痺れるような痛み
に、とうとう涙があふれて、アンリエッタは手足を振り乱して抵抗した。

「お、お願いです、もうやめてください！ これ以上されたら……わたし……っ」



「おかしなことを言う。おれと夫婦になりたいと望んだのはおまえのほうだろう」

アンリエッタは泣きながら激しく首を振る。彼と親しくなりたいのは事実だが、こんなふうに乱暴されるのは恐ろしいばかりで耐えられない。

それまで乳房に添えられていた彼の手が背中に回り、思わせぶりにすつとくぼみの部分を撫で上げてくる。その刺激すら恐怖の対象になって、アンリエッタは短い悲鳴を上げると二の腕を抱きしめ、身体を小さく縮めた。

「いやです、もう、こんなことは……!」

「だったら、おれと親しくなりたいと二度と口にするな。いいな？」

アンリエッタはハッと息を呑み、涙で顔をくしゃくしゃにしながらかも首を振った。

「や、それはいやです……っ。わ、わたしはあなたと……っ」

痛みを与えられることはもちろんつらい。だが彼に見向きもされなくなることを考えると、足下が崩れるような心許なさが襲ってくる。

そんなアンリエッタに、オーランドはチツと鋭い舌打ちを響かせた。それがまた彼女の胸をえぐっていく。

(どうしてオーランド様はこんなに怒っていらっしゃるの？ 三年前はあんなに優しくしてくださったのに……っ)

「はう！ うっ……!」

二の腕を敷布に押さえつけられ、赤くなった乳房に舌を這わせられる。肌をたどるぬめった感触

からは、捕らえた獲物を駈（なげ）るような意思が伝わってきて、アンリエッタは喉を震わせた。

（こんな、ひどいこと……っ、わたしが知るオーランド様がなさるとは思えない）

もしや彼はオーランドそっくりの別人ではないだろうか。絶望のあまり突拍子もないことを考えながらも、アンリエッタは絶（すが）ゆるような思いでそつとオーランドをうかがう。しかし……

（オーランド様……？）

涙で滲（にじ）む視界に、真上から見下ろすオーランドの顔が映り込む。

これだけ冷たいことを口にし、乱暴に押さえつけてくる彼のことだ。さぞかしいら立った表情を浮かべているのだろうかと思っただけが――

（オーランド様……どうして、そんな苦しそうな顔をなさっているの？）

わずかにかいま見えたオーランドは、なにか苦いものを口に含んだような、痛みをこらえているような……ひどく苦しげな顔をしていたのだ。

思いがけない表情に目を見開いたアンリエッタだが、彼女の視線に気づいたオーランドは一瞬で険しい顔つきに戻る。そしてあるうことか、凝（こも）った乳首の根本に軽く爪を立ててきた。

「いっ……！」

「それなら、二度と近づきたくないと思わせてやるまでだ」

オーランドの手が下肢に滑る。ハッと身を強（こ）張（は）らせたアンリエッタの耳に、再び布が裂かれる音が聞こえてきた。

腰元に引っかかっていた夜着を荒々しく取り払われ、気づけばアンリエッタは一糸（ま）纏（まと）わぬ姿で寝

台に押しつけられていた。

「あ、ああ……っ」

枕元に灯（ともし）された明かりに、白い身体がぼうつと浮かび上がる。

わずかに身を起こしたオーランドが、細い身体につうと視線を走らせるのを目の当たりにして、アンリエッタの胸はどくどくと大きく鼓動を打ち始めた。

（見られている……オーランド様に、すべて……っ）

恥（は）ずかしい上にいたたまれなくて、たちまち身体中が真っ赤に染まる。

隠（かく）そうにも腕を押さえつけられているため身動きできず、アンリエッタはせめてもと思い、両足をしっかりと閉じて、一番恥（は）ずかしいところを見られないようにした。

その様子を見たオーランドがくつと口元を歪める。

「裸を見せる程度で、おれを落とせると思ったら大間違いだ。こんな痩せっぽちの身体なら、なおさらな」

身体つきについてさらにけなされ、アンリエッタは唇を噛みしめる。恥（は）ずかしさが惨（み）めさに取って代わって、新たな涙が静かにこめかみを伝った。

だが悲しみに浸る暇はなかった。オーランドの手がいきなり太腿の隙間に入り込み、足の付け根をまさぐってきたのだ。

彼の指先が不浄のあたりをさまようのを感じて、アンリエッタは短く悲鳴を上げた。

「きゃあ！ な、なにっ？ どうして、そんなところ……っ」

深窓の姫君らしく、闇ごとのすべてを知らぬまま初夜に臨んだアンリエッタは、彼がなぜそのようなところにふれるのかわからなくて、ただただ恐ろしくなる。

だがオーランドは動きを止めず、それどころか、アンリエッタの内腿に手をかけると、彼女の足を限界まで大きく開かせてきた。

「や、やあ……っ」

恐怖に喉が引き攣る。足を閉じようにも、オーランドがみずからの身体を滑り込ませてきたため、彼の胸を締めつけることしかできなかった。

（こんな、あられもない恰好をさせられるなんて！）

今の自分の姿を想像したアンリエッタは、目の前が真っ赤になるほどの羞恥心に襲われる。

だがオーランドの指先が淡い茂みのさらに下へと潜り込み、先ほど以上に恥ずかしい部分を探り始めるのを感じると、たちまち恐怖心が戻ってきた。

「な、なにを……っ、きゃう！」

次の瞬間、その部分にツキリとした痛みを感じる。見れば、オーランドの指先が薄紅色の割れ目の中へと潜り込もうとしていた。

「ひっ！ や、やめ……、っあああ！」

何者も迎え入れたことがない狭いところに、太い指が容赦なく押し入ってくる。アンリエッタはとつさにずり上がって逃げようとした。

それを易々と押さえつけながら、オーランドは「抵抗するな」と冷たく命じてくる。

無理やり広げられた隘路がぎちぎちと軋む中、指が付け根の部分まで入り込んできて、アンリエッタは悲鳴を上げた。

「いやっ、い、痛いっ、痛いのお……！」

ズキズキとした痛みと、身体の中を異物がうごめく感覚に真っ青になって、アンリエッタは涙をこぼしながら弱々しく首を振る。

オーランドが再び舌打ちして、いきなり上体を倒してきた。

今度はなにをされるのかと萎縮するアンリエッタだが、彼の美しい面が秘所にぐつと近づいていくのを見て目を見開く。

「やっ、やだ……、あつ、あああ……ッ？」

次の瞬間、彼の唇が、指が潜り込むところのほんの少し上のところ……そこに隠された快樂の芽に軽くふれてきて、アンリエッタの腰がびくんと跳ねる。

驚愕に息を呑んだとき、オーランドが唇を開き、そこから赤い舌をのぞかせるのが見えた。

まさか、と身構えるアンリエッタの前で、彼は伸ばした舌尖を芽の部分にねつとりと這わせる。

「ひっ……う、うあー！」

ビリッとするような感覚が立ち上り、アンリエッタの細い肩が跳ねた。覚えのない感覚に身体中が反応して、突き立てられたままの彼の指をぎゅっと締めつけてしまう。

その感覚を敏感に感じ取ってか、オーランドの肩がわずかに寄せられる。

「やっぱり、嬲られて感じるんじゃないか」

「ち、が……っ、あ、ああ、うう……！」

否定の言葉は喘ぎ声のようなうめきに押し流される。

不思議なことに、オーランドの舌先がその部分を丹念に舐めていくと、痛みではない妙な感覚が突き上げてきて、身体中がびくびくと引き攣った。

「あう、や……、んっ、んん……！」

指が潜り込む隘路は相変わらずヒリヒリと痛む。けれど芽の部分は、彼の熱くぬるつく舌を感じるたびに燃えるような感覚を発して、徐々に充血して膨らんできた。彼の吐息がかかるだけでも、腰がびくんと揺れてしまう。

(な、なに？ むず痒くて……もどかしい……っ)

「ふ、んん……、んあっ……っ……！」

びちゃびちゃと猫がミルクを舐めるような音が聞こえてきて、アンリエッタの頭はぼうつと火照ってくる。呼吸が震えて、唇から漏れる声には苦痛以上に甘いものが含まれてきた。

腰から下に力が入らなくなってきた、彼の舌が動くのに合わせて、開いたままの足が強張る。

やがて、彼の指が潜り込んでいるところのさらに奥が、じんわりと熱を帯びて煙り始めた。

「は、はあ、はあ……っ、や、やああん……っ」

じっとしていられなくて、つい腰を動かそうとしてしまう。そうすると指が挿れられたままの内部分ツキリと痛んで、アンリエッタは眉を寄せた。だがその痛みも、いきなり突き立てられたときに比べて、ずいぶんなりを潜めている。

今や苦痛よりも、初めて感じる快感のほうが大きくなっていることに気づいて、アンリエッタは狼狽した。

(ど、どうして、わたし……こんなことをされて、恥ずかしくて、いやなはずなのに……)

もどかしいような、なんとも言えないふわふわとした感覚。少し怖いけれど、やめてほしいとは思えない。

(むしろ、もつと……、もつと、さわってほしい……)

アンリエッタは敷布を掴んでいた手を、そつとオーランドの頭に滑らせる。ほとんど無意識で、彼のつややかな栗色の髪に指を通した瞬間。

「いっ……！」

太腿を押さえていたオーランドの手が、いきなりぐつと柔肌を掴んできた。内腿に爪を立てられ、アンリエッタはたちまち心地よさから引き戻される。

びっくりして目を上げると、そこにはそれまで以上に不機嫌な表情を浮かべたオーランドがいた。

「あ……」

いつの間にか彼の髪を掴んでいることに気づき、アンリエッタの全身から血の気が引く。

慌てて手を引くも、オーランドの表情は変わらなかった。

「少し甘いことをしてやれば、すぐにそうやってつけ込もうというわけだ。なにも知らない顔をしなからとんでもない女だな」

「な……、ち、ちが……」

「なにが違う？　ほんの少し舐めただけで、これだけ濡らして」
「あっ！」

沈められたままの彼の指がくの字に曲げられる。鋭い痛みが走ると同時に、くちゅりという水音が聞こえてきて、アンリエッタは大いに戸惑った。

彼の言うとおり、いつの間にかその部分がわずかな湿り気を帯びている。
(な……、ど、どうして)

うるたえるアンリエッタに気づいているのかいないのか、オーランドは皮肉に満ちた笑みを浮かべる。そしていきなり、指を素早く引き抜いた。

「やあう！」

入り口になにかが引っかかるような痛み、アンリエッタはびくりと身体を強張らせる。

だが息が整わないうちに、今度は二本の指を震える割れ目にねじ入れられた。

「いつ、いやあ、痛い……！」

「嘘をつけ。これだけ濡らしているくせに」

言いながら、彼は手首をひねって、隘路をこじ開けるように指を進めていく。わずかに生まれた隙間からあふれた蜜が、つうと臀部を伝うのを感じて、アンリエッタは首を左右に振った。

「お願い、抜い……あ、ああ、いや！　動かさないでえ……！」

根本まで沈めた指を、内部でばらばらに動かされて、ひりつくような痛み、アンリエッタはか細い声を上げた。

「ふ、うう、う……っ」

逃れようと身をよじってもごとごとく押さえつけられ、止まりかけていた涙が再びぶり返してくる。

「はっ、ああ……、も、やめて……っ」

「そんなにやめてほしいなら、さっさと終わらせてやる」

「あうっ！」

指が勢いよく引き抜かれ、アンリエッタは息を詰まらせる。

全身で震えながらも逃げだそうとするが、オーランドの腕が背に回され、そのままぐつと身体を引き寄せられて、身動きひとつとれなくなった。

「やああ……！」

「暴れるな」

アンリエッタを抱きすくめながら、オーランドは片手をみずからの下穿きに伸ばす。

がくがく震えながらもがいていたアンリエッタは、直後、下肢に熱いながか押しつけられるのを感じ、びくりとした。

(な、に……これ……っ)

じつとりとした熱さを発するそれは棒状で、かすかな湿り気を帯びている。

その先端が震える壁を掻き分けていく。そして、先ほどまで指が突き立てられていた部分に押し当てられるのを感じ、アンリエッタはひっと息を呑んだ。

「や、やめて……っ」

本能的な恐怖に喉が引き攣る。恐怖で狭まった視界に、眉根を寄せたオーランドの顔がわずかに映り込んだ。

その紫の腫が痛ましげに伏せられた気がして、アンリエッタは目を瞬く。が、突然襲ってきた激痛に戸惑いは一気に吹き飛ばされた。

「い、や、……ああああ——ッ!!」

身体がふたつに引き裂かれるような衝撃だった。

先ほどまで押し当てられていた棒状のなにかが、ぎちぎちと隘路を広げて押し入ってくる。

指とは比べものにならない、太くて硬い熱塊の侵入に、アンリエッタは喉を反らして絶叫した。痛みに見開いた腫が新たな涙に潤んで、身体中がきつく強張る。

「あ、ああ、あ……!!」

痛みのみならず言葉も出てこない。いやいやと首を振るのが精一杯だ。

なんとか離れてほしくて彼の腕を叩くが、オーランドはますます彼女を引き寄せ、ぐつと腰を押し進めてくる。

「ひゅ……!!」

腰が割れそうな痛み、アンリエッタはぼろぼろと涙をこぼす。オーランドが耳元で荒い息をついているのが聞こえたが、構っている余裕はなかった。

「う、うう……っ」

「っ……動くぞ」

「いや……、あ、ああ、いやああ……ッ!」

きつく抱きすくめられた状態で、身体を中心にずんつと突き上げられる。

かと思えば腰が離れ、同時に押し込められた熱塊もぎりぎりまで引き抜かれた。このまま抜いてくれるのかと思えば、それまで以上に奥にずんと押し込められて、アンリエッタは息を止める。

「や、や、……いや、もう……助けて……」

息も絶え絶えになりながら懇願するが、オーランドは動きを止めない。

それどころかさらに大きく腰を動かして、アンリエッタの細い身体を荒々しく揺さぶった。

「あ、あうっ、……ううう……!!」

ふたりの動きに合わせ、寝台がわずかに軋む。

彼が腰を動かすたびに、無理やり暴かれた処女壁が激しくこすられ、火傷したようなヒリヒリとした痛みがわき上がった。最奥を突き上げられるたびに息が止まりそうになる。

そのうち抵抗する言葉も出てこなくなり、お互いの腰がぶつかり合う音と、隘路を掻き回されるぐちゃぐちゃという水音だけが響くようになった。

そうしてどれほどの時間が経ったか——

「ぐっ……」

不意に、オーランドが低くうめいて、アンリエッタの肩を敷布に押さえつける。そうして勢いよく上半身を離した。直後、身体をさいなんでいた熱塊が勢いよく引き抜かれる。

「やつ、やあう……」

痛みのでいで激しく震えたままの足に、温かななにかが浴びせかけられた。

それは食い込んだ指の痕が残る内腿をどろりと伝っていき、未だ痛みにひくつく秘所まで汚していった。じんわりとした感覚がひどく気持ち悪く感じて、色をなくしたアンリエッタの唇が大きく震える。

寒さと痛みにかちかちと歯を鳴らしながら、アンリエッタはおそるおそるみずからの下肢に目を

向けた。太腿から秘所を覆うその温かななにかは白く、ところどころ赤い筋がまざっている。

(な、に……、これは、いつたい……?)

考えてみるが、痛みと衝撃に麻痺した思考では、とても答えは見つけられない。

そのとき、前屈みになって肩を上下させていたオーランドが、ふうと大きく息をついた。それを聞いてぎくりとする。

荒々しく開かれた身体は限界を訴えていて、もう抵抗する気力もない。かといってまた同じような痛みを与えられたら、無残に踏みにじられた恋心が粉々に壊れてしまう気がして、たまらなく恐ろしくなった。

知らず身体を硬くしながら、祈るような思いでオーランドを見つめたアンリエッタは、その面を見やつて再び息を呑む。

わずかに息を切らし、自身の放った白濁を見るオーランドは……なにかをこらえるような苦々しい表情を浮かべていたのだ。

(……どうして、そんなお顔をなさるの……?)

だが、それを尋ねる力はもうなかった。

つらい現実から逃れるように、アンリエッタの意識は、深い眠りの中へと沈みこんでいった。



「うっ……」

目元にちらちらとまばゆい光が入り込む。それに誘われるように、アンリエッタは重たい臉をゆっくり開いた。

見慣れない部屋が視界に飛び込んでくる。大きく取られた窓からは朝日が降り注ぎ、寝台の上でうつぶせになるアンリエッタを照らしていた。

「あ……、わたし……?」

いつの間にか眠ってしまったのだろう。それにここは……?

胸元にこぼれる淡い金髪を払いつつ、アンリエッタは身体を起こそうとするが――

「痛っ……!」

唐突に足の付け根から鈍い痛みが広がって、アンリエッタは瞠目して下肢を見下ろした。

剥き出しになった白い足のあいだに、わずかながら赤い筋が見える。同時に太腿にこびりついた汚れが見えて、記憶が一気に戻ってきた。

(そうだわ。わたしは昨日、オーランド様と結婚式を挙げて……自室にあの方をお迎えして、それから……)

冷たい言葉を浴びせられ、手ひどく身体を開かれたのだ。

薄闇の中、肩を押さえつけてきた強い力と、のしかかっていた身体の重み、そして与えられたひどい痛みを思い出して、アンリエッタの全身からざっと血の気が引く。下肢の痛みは意識するごとに大きくなるようで、知らず呼吸が浅く速くなった。

(あんなひどい抱き方をされるなんて……)

昨夜の入浴時のことか思い出される。性的に無知であろうアンリエッタを見越して、身体を清めるあいだに、年配の侍女が初夜の心得を教えてくださいました。

『基本的には殿方にお任せすればよろしいのですが、最中に痛みがある場合がございます。それは女性であれば誰もが通る道ですので、心を落ち着かせて臨んでくださいませ』

そのときは神妙に頷いたものだが、実際には、とても落ち着くことなどできなかった。

さらにオーランドの冷たいまなざしと、親しくなりたいと口にするなど言われたことも思い出される。

「う……」

昨夜もさんざん流した涙がまた盛り上がってきて、アンリエッタは顔をくしゃくしゃに歪めた。

別に、情熱的な愛の言葉を望んで嫁いできたわけではない。アンリエッタはずっと彼のことを思っていたが、これは国同士の政略結婚だ。相手に始めからアンリエッタのような愛情がないこと

は心得ていた。

それでも、泣いていた過去の自分を優しく慰め励ましてくれたオーランドとなら、政略結婚でも、ゆくゆくは愛情を持って向き合えるようになるだろうと思っていたのだ。

彼が優しい人物だとわかっていたからなおさら、期待も大きかった。

だが現実はどうだろう。手ひどく抱かれ、そのまま打ち捨てられ、今朝はこの部屋に彼がいたという気配すら感じられない。夜中のうちに出て行ったのだろうと思うと、惨めさと切なさに涙が抑えられなかった。

だが本格的に泣き出す前に、扉がコンコンとノックされる。

「アンリエッタ王子妃様？ お目覚めでございますか？」

アンリエッタはハッと我に返って、慌てて目元をぬぐった。

「お、起きています」

かすれた声で答えると、お仕着せに身を包んだ侍女が断りを入れて寝室へ入ってきた。

「お顔を洗う支度と朝食をご用意いたしました。お身体の具合はいかががでしょうか？」

心配そうに尋ねられ、アンリエッタは恥ずかしさと気まずさに薄く頬を染めた。

「……大丈夫よ」

だが汚れた身体を見られるのには抵抗があつて、アンリエッタは毛布をたぐり寄せて胸元を隠す。侍女は心得た様子で、温かなお湯で蒸らした布を差し出してきた。

「本日は朝議がございますが、ご出席なさいますか？ おつらいようでしたらその旨をお伝えいた

しますが」

「朝議……」

アンリエッタは、記憶を探る。

祖国にいた頃、嫁ぎ先のディーシアル王国について、様々な知識を学ばされた。朝議というのは、確か毎朝、王族と議員の資格を持つ貴族が一堂に会して、前日までに集められた案件について議論する習わしのことだったと思い出す。

王子の妃となったアンリエッタにも、朝議への参加資格が与えられているのだろう。

ならばここで傷心に浸っているわけにはいかない。オーランドと愛し合いたいというのも、まぎれもない本心だが、嫁いだからには、王子妃として彼と彼の国のために働きたいというのも、アンリエッタのいつわりない思いだった。

「すぐに支度します。手を貸してちょうだい」

そうしてアンリエッタは侍女の手を借り、痛む身体を押して寝台から下り立った。

用意されたドレスは季節に合わせた若菜色で、袖口には細かい刺繍ししゅうが施してあった。母国にいた頃は化粧などあまりしたこともなかったが、侍女によって綺麗に粉がはたかれ、顔色の悪さをごまかすように頬紅が重ねられる。

用意された朝食は食欲がわかず、ほとんど食べられなかった。そうこうしているうちに朝議の間が迫り、アンリエッタは侍女の案内で議会議場へ向かう。

広々とした廊下には議員やその奥方たちが集まり、議会議場の扉が開くのを待ちながら、たわいも

ないお喋りに興じていた。

（オーランド様はどちらかしら？）

きよろきよると周囲を見回していると、背後から鋭い声が響き渡る。

「アンリエッタ王子妃！ わたくしのもとへおいでなさい」

驚いて振り返ると、そこにはこの国の王妃であり、オーランドの生母でもあるローリエが立っていた。王妃らしくきらびやかな装いに身を包んでいるものの、目元に深く刻まれた皺とつり上がった眉が、いかにも気難しそうな印象を与える。

だがその髪や瞳の色はもちろん、顔立ちもオーランドによく似ていることもあって、アンリエッタは彼女とも親しい関係を築きたいと思っていた。

「おはようございます、王妃様」

アンリエッタは慌ててスカート裾をつまみ挨拶する。本当は深く頭を下げなければいけないのだが、下肢に痛みが走り、ぎこちない動きで中途半端なおじぎになってしまった。

それを見たローリエはぎゅっと眉間に皺を寄せる。

「なぜおまえだけがこちらにきているのです。第一王子はどうしました？」

「オーランド様は……」

口ごもるアンリエッタに代わり、うしろに控えていた侍女がそっと助け船を出した。

「王子殿下におかれましては、昨夜のうちに部屋へお戻りになったようです。今朝はまだ王子妃様も、殿下にお目にかかつてはおりませぬ」

「まあ、なんということ……っ。初夜に夫を引きとめておけぬとは、花嫁に魅力がないと言っているのも同然ですね」

痛烈な批判に、アンリエッタは首をすくめる。内容もそうだが、人目があるところで堂々と言われるのは恥ずかしく、それ以上に情けなくもあった。

「申し訳ありません……」

「まったく、王子には困ったものですね。このところ朝議にも顔を出さなくなつて。今日くらいはお小言は控えようと思つていたのですよ？ なにせ結婚式の日ですからね。それなのにあなただけがここにおいて、肝心の王子がいまいとはどういうことですか。まったく……」

王妃が大仰に嘆くせいか、貴族たちも興味を引かれたようにこちらを振り返る。

無数の視線に無遠慮に見つめられて、アンリエッタがたまらず逃げ出したくなつたとき、今度は背後から朗らかな声が聞こえてきた。

「んっ、まあ。齒に衣着せぬ物言いですこと。そちらの姫君を大切なご子息の花嫁に選んだのは、他でもない王妃様ではございませんことお？」

挑発的なその言葉が響いた途端、ローリエの顔つきが一気に険しいものに転じる。

アンリエッタも慌てて振り返つた。するとそこには、ローリエに負けず劣らずきらびやかなドレスに身を包んだ、肉感的な美女がたずんでいた。

彼女は派手な扇で首元を扇ぎながら、傲然と顎を上げて言い募る。

「それをどのように皆の前でこき下ろすなど、ご自分の見る目がなかつたと言つているようなもの

ではございませんか！ なんとも滑稽なことですよ。おほほほっ！」

すると彼女の周りを囲んでいた貴族たちが、同意するように小さく笑い声を上げる。

それを見たローリエは憤怒の形相で、アンリエッタを押しつけ、つかつかと美女の前に立つた。

「お黙り!! 妾の分際で生意気な！ そういうおまえの息子は、先頃また賭場で多額の借金を作つたというではないのっ。賭場の主人が請求書の山を抱えておまえの邸を訪ねたことは、この王宮でもすつかり噂話の種になつていのですよ!？」

すると美女も白磁のような白い頬を真っ赤に染めて、怒濤の勢いで言い返した。

「んっまあっ！ それを言うならそちらの息子だつて、娼館で好き勝手していると評判になつているじゃございませんかっ！ 第一王子ともあろう者がその体たらく、それこそ王宮の汚点ではなくつて!？」

「年甲斐もなくじゃらじゃらと派手な装いをして、立場もわきまえずに王宮を練り歩く女狐に言われたくはないわ！ わたくしの息子が王位を継いだら、おまえなど真っ先に追放してくれる!!」

「やってごらんさいな！ 家柄だけしか誇るものがないつまらない女が！ 王位を継ぐのはわたしの息子よ。あなたのことなんてお家ともども取りつぶしにしてくれるわ!!」

バチバチバチツ、とふたりのあいだで見えない火花が炸裂する。

聞き苦しい上にかなりあけすけな喧嘩内容に、アンリエッタは驚きもあきれも通り越してぼかんと見入ってしまった。

「えっと……、あなた、名前はサリアと言つたかしら」

ひとまず自分のうしろに控えていた侍女に声をかけると、彼女は「はい」と丁寧に応えた。「王妃様と言いつ争っている、あのお美しい方はどなたなのかしら。昨夜の祝宴にはいらつしやらなかったと思うのだけけど……」

議会場の前で喧々と言いつ合っているのは褒められたものではないが、目を瞞るほど美しい女性だ。ローリエ王妃ももちろん美しいが、こうしてふたり並ぶとやはり美女のほうに軍配は上がる。

「国王陛下の第二妃であらせられるイザベラ様ですわ。祝宴にお出にならなかったのは、王妃様が同席を許可しなかったからだと聞いております」

なるほど、とアンリエッタは納得する。

激しく言いつ争っている様子からして、ローリエ王妃が夫の愛妾を蛇蝎のごとく嫌っているのは明白である。

そしてそれはイザベラ妃も同様らしい。案外昨夜の祝宴に呼ばれなかった腹いせもあつて、朝から喧嘩を吹っかけてきたのかもしれない。

それにしても、高貴な身分の者が衆人環視の中で言いつ争うなどあつてはならないことだ。見苦しいだけならまだしも、ふたりの夫である国王陛下の面目が丸つぶれになる。

しかし居並ぶ貴族たちにとっては日常茶飯事の光景なのか、ほどなくあちこちから抑えきれない嘲笑が聞こえてきた。

「毎度思うことだが、どちらもご自分の息子を王位につけてたくて必死だなあ」

「特に王妃様は日に日にヒステリックになられて……。まあ、ここ一年のオーランド殿下の行状を

見る限り、絶対と思われていた王太子の位も危うくなって参りましたからね」

「それを見てイザベラ様が勢いづいてきているわけだが、第二王子殿下があれではな……」

やれやれ、と言わんばかりの生ぬるい空気が漂ってきて、アンリエッタはひどく戸惑う。

だがぐるりと振り返ったローリエが、怒りの矛先をアンリエッタにも向けてきたため、なにかを尋ねる暇はなくなつた。

「なにをそんなところで突つ立っているのですか！ 夫が不在だというのに、自分だけ朝議に参加する妻がありますか！ 今すぐオーランドを連れていらつしやい！」

アンリエッタは慌てて口元を引き締め、「か、かしこまりました」と頭を下げた。

急いでその場を離れるあいだも、ローリエとイザベラの罵り合いが聞こえてくる。

口汚い争いは聞いているだけでも神経がすり減っていくようで、人気のないところに出たアンリエッタは、思わずほーつと詰めていた息を吐き出したほどだった。

その後、アンリエッタはオーランドを探して、彼の自室や城内のめぼしいところを探してみたが、目的の人物を見つけることはできなかった。

自室に戻ったときにはもうへとへとになつていて、長椅子に寝そべるように倒れ込んでしまう。サラアが運んできた飲み物を口にしながら、アンリエッタはがっくりと肩を落とした。

「オーランド様はお城にはいらつしやらないのかしら……。サラア、どこかあの方の行きそうなど

ころに心当たりはない？」

「さあ、わたしにはなんとも。ただ……」

「ただ？」

「……ここ最近、オーランド殿下は城においでにならないことのほうが多いようでして」
「視察に出る機会が多いということかしら？」

「いえ、そうではなく」

「言いよどむサリアは、自分が言ってもいいものかどうか思い悩んでいるようだ。」

アンリエッタは姿勢を正してまっすぐサリアを見つめた。

「サリア、わたしはオーランド様の妃よ。あの方のことならどんな些細なことでも知っておきたいの。なにか知っていることがあるなら、どうか教えてちょうだい」

「……あくまで、わたしが見聞きしたことですので、鵜呑みになさらないでいただきたいのですが」

おずおずと言い添えてから、サリアは口を開いた。

「ここ一年ほど、オーランド殿下はあまりご政務に携わっていらっしゃらないようです。朝議はもちろん、それ以外の場にも顔を出さず、昼夜を問わず城をあけていることが多いようで……」

「なんですって。政務に携わっていない？」

予想だにしかかった事態に、アンリエッタはただでさえ大きな瞳をまん丸に見開いた。

「そんな、だって、わたしの知っているオーランド様は——」

隣国が原因不明の病に侵されると聞いてすぐ、医師を連れてみずから足を運んでくれるような人物だ。薬のおかげで病が収束したあとも、ディーシアル国からは麦などの物資が届けられた。それを手配したのもオーランドだと聞いている。

そのことをアンリエッタが話すと、サリアも神秘的な面持ちで頷いた。

「その通りです。オーランド殿下は早いうちから政務に打ち込み、臣下の多くから、いずれ国を背負うのにふさわしい人物になるであろうと期待されていたのです。ですがこの一年のあいだに、ひとが変わったようになってしまわれて、今では表に出てくることもほとんどございません」

「ひとが変わったように……」

ゆっくり繰り返し返しながら、アンリエッタは昨夜のオーランドを思い出す。かつての彼からは想像もできない冷たい雰囲気は、まさにそうとしか表現できない変貌ぶりだった。

(まさか、王子としての責務まで投げ出していらっしやるなんて)

そこでアンリエッタは、今朝の議員たちが呟いていた言葉を思い出した。

「あの、貴族の誰かが『イザベラ様が勢いづいてきている』というようなことを言っていたけど、それはどういう意味なのかわかる？」

「イザベラ様はかねてより、ご子息である第二王子レオン殿下を王位に就けたいとお考えでした。オーランド殿下が政務に無関心な今のうちに、とお考えなのでしょう」

「第二王子、レオン様？」

初めて聞く名に、アンリエッタはばちばちと目を瞬かせる。昨日の結婚式の記憶をたどっても、

イザベラ同様、そういった名前の王族は参列していなかった。

だがローリエがイザベラの息子のことを罵^{ののし}っていたことを思い出し、もしかして、と口を開く。「レオン様も、その、今のオーランド様と同じように、ご政務にはあまり興味を持たれない方なのかしら」

「ええ、まあ……。オーランド様と違って、レオン様は幼い頃からいろいろと問題をお持ちの方でして」

相手が王子であるだけに控えめに答えるサリアだが、アンリエッタにはそれで充分だった。

(要するに、どちらの王子様も王位を継承するには問題があるということね。そして本人たちを差し置いて、母親同士が王位争いに熱を上げている、と)

「大変なのね……」

つい他人事のように呟いてしまいが、「まったくです」というあきれた声が聞こえて、アンリエッタは驚いて顔を上げた。

「オーランド殿下もお姫様を娶^{めと}ったのですから、早く落ち着いてくださるといいのですが」

ため息とともに吐き出したサリアは、アンリエッタがじっと見つめていることに気づいて、ハツとした様子で口をつぐんだ。

「も、申し訳ございません。つい口が滑って……」

「あら、そんなことは気にしないで。むしろそうやってなんでも話してもらえたほうが嬉しいわ。わたしたち年も近いし、仲良くしていきましようよ」

「ですが……」

アンリエッタはにっこりと微笑^{ほほえ}んだ。

「わたしが生まれたフィノーは小さな国ということもあって、この国ほど格式高い風潮はないの。侍女にまぎって一緒に噂話を楽しむことなんて日常茶飯事だったわ。あなたともぜひそういう関係になりたいのよ。だから、ね？」

他国の風習の違いに驚いたのか、サリアは一瞬間食らったような顔をしたが、ほどなく相好を崩して頷いた。

「王子妃様のお望みとあらば、そうさせていただきます。……実はわたしも王宮に上がったばかりで、あんまり堅苦しいのは肩が凝^こって」

「ふふ、お互い早く慣れるように頑張りましょうね」

気軽な言葉をかけ合うと、ふたりとも肩の力が抜けて、自然と柔らかな笑みがこぼれる。

だが再びお喋りに興じる前に、厳しい顔つきの女官が部屋を訪れ、アンリエッタへ王妃の居室にくるようにという伝言を運んできた。

くつろぎかけていたアンリエッタは慌てて立ち上がり、ただちにローリエのもとへ足を運んだ。

オーランドは城にいなかった旨を伝えると、王妃は大仰にため息をつき、アンリエッタをいらいらとしたまなざしで睨^{にら}みつけた。

「まったく。オーランドも妻を持てば少しは変わると思ったのに、とんだ期待はずれなこと。いい

こと？ わたくしの息子が悪いのではありません。妃であるおまえが、あの子の心を掴めないのが悪いのです。そのことをきちんとわかっていますか？」

顎を上げた状態で傲然と言いつた、アンリエッタは素直に頭を垂れた。

「わたくしの不徳のいたすところで、心苦しう思っております……」

「フン。まあいいでしょう。——いいこと？ 明日こそは必ずあの子を朝議の場に引っ張ってきなさい。さもなければおまえの国への麦の供給は止まると思いなさい。我が国からの麦の供給が途絶えたら、フィノーの民はきつと無事では済まないでしょうね？」

アンリエッタは青くなってぐつと奥歯を噛みしめた。

彼女の祖国であるフィノー王国は、国土の半分を山岳地帯が占めるため、自然環境が厳しく、麦はほとんど育たないのだ。そのため、フィノーは古くから麦は他国のものを頼りにしてきた。

その筆頭となるのが南に位置する隣国、ここディーシアル王国なのである。ローリエの言葉は実質上、フィノーの民を質に取った脅迫のようなものだった。

（こちらに嫁ぐことになったとき、国同士の友好のために王妃様がわたしを望んでくださったと、お父様からは聞かされたけれど……）

今のローリエを見ると、本当にそうだったのだろうか、という疑問が生じる。

初恋のひとの妃になれたことは喜ばしいことだが、もしかしたら自分の意に反して花嫁を押しつけられたオーランドはおもしろくなかったのかもしれない。

（あ……だから、昨夜はあんなふうにお怒りになったのかしら）

頑なに妃を拒絶するのは王妃様に対する反抗によるものだったのだろうか。だが、そうだとするとあの仕打ちはやはりひどいように思う。

ついうつむいて考え込んでしまったアンリエッタは、「聞いているの!？」と上擦った声で叫ばれ、弾かれたように顔を上げた。

「す、すみませ……きやつー!」

肩に軽い衝撃を受け、アンリエッタはうしろへよろける。見ればドレスの肩口が白く汚れ、投げつけられたとおぼしき白粉の瓶が足下に転がっていた。

「わたくしを前にして考え事など、いい度胸なこと！ 明日と言わず、すぐにでもおまえの国への麦を止めてやろうかしら!？」

「そ、そんな、おやめくたさいっ!」

「ならば二度とわたくしを蔑ろにするようなことは許しません！ 誰であろうと、このわたくしを虚仮にするようなことは絶対に許さない。絶対に……!」

ぎらぎらと燃える紫色の瞳の前に、ローリエの本気を感じ取って、アンリエッタはぐくりと唾を呑み込む。民を質に取るなど王妃の考えとは思えなかったが、それを指摘するほどアンリエッタも恐れ知らずではない。

（オーランド様を朝議へ連れて行かなければ、本当にフィノーが大変なことになるかもしれない）

とはいえ、オーランドの様子からそれが容易なことでないのははっきりしている。頭を痛めながらも、アンリエッタは王妃の部屋を離れた。

思い悩んでいるうちに夜は更けて、食事と入浴を勧められる。
就寝の支度を終えたアンリエッタは、オーランドの部屋を訪れる決意を固めた。

「アンリエッタ様、大丈夫でございますか？」

オーランドの部屋に続く扉の前に立ち、胸元を押さえて深呼吸したアンリエッタに、サリアが心配そうなまなざしを向けてきた。

アンリエッタはぎこちなく微笑み、「大丈夫」と頷く。だが実際は、緊張と恐怖で足がすくみそうになっていた。

（昨日あんなふうに使われたことを思うと、やっぱり怖い……）

今のアンリエッタは、夜着にガウンを重ね、金髪を緩い三つ編みにまとめている。心許ない装いはいかにも無防備だが、こんな遅くにドレスで訪ねるのもどうかと思い、結局このままやってきてしまった。

（また、あんなふうにされてしまったら）

恐ろしい想像に身体が震える。それでもロリーエの求めに応えるためには、今夜中にオーランドに会う必要があった。なにより……ここでおびえて尻込みしては、ますます彼に会いづらくなるという思いもあったのだ。

（そんなことになれば、ますますあの方の心は離れて行ってしまう気がする。……そんなのはもつといや）

伊達に三年も相手を思い続けてきたわけではない。ようやく結ばれたこの幸運を逃しては、これまでの恋心を裏切ることにもなりかねないのだ。

（親しくなりたいと口にするなど言われただけで、嫌いだと言われたわけではないもの。だから大丈夫。また完全に拒絶されたわけではないわ）

物怖じしそうな心を励まして、アンリエッタは「よし」と気合いを入れる。そうしてみずから扉を音高くノックした。

すぐに取り次ぎの従僕が出てきて、アンリエッタの姿を見ると驚いたように目を瞠る。

「突然ごめん下さい。オーランド様にお会いしたいのだけど、今はお部屋にいらっしやる？」

「はい、王子妃様。どうぞお入りください」

恭しく頭を下げて部屋へ迎え入れられ、アンリエッタはひとまずほつと息をつく。昨日のオーランドの態度から、もしかしたら「妃を部屋に入れるな」と命じられているかもと少し不安に思っていたのだ。

居間まではすぐ案内されたが、そこで待つように言われ、アンリエッタは手持ちぶさたに室内を見回す。深緑の落ち着いた色合いで統一された室内は、どことなくオーランドらしいと思わせる雰囲気漂っていて、自然と口元がほころんだ。

しかし奥の扉から戻ってきた従僕が、申し訳なきような顔で告げた言葉に顔色を失う。

「殿下は王子妃様とはお会いしたくないと仰せです。申し訳ありませんが、今日のところはお引き取りくださいませ」

「そんな……」

深々と頭を下げる従僕の一つじを見つめ、アンリエッタは悲しくなる。

だがここで引き下がれない事情もあり、一度唇を噛みしめたアンリエッタは、正面の扉に視線を据えた。

「あちらにオーランド様がいらつしやるのね？」

「え？ ええ、はい。……王子妃様っ？」

「アンリエッタ様！」

従僕とサリアがそろってぎよつとした声を出す。

アンリエッタは構わずずんと扉に向かって進み、真鍮製の取っ手に手をかけた。

そうして扉を開けば、居間に負けず劣らず広々とした室内が目に入る。

その中央には天蓋付きの寝台があり、オーランドはそこに長い両足を投げ出すようにしてくつろいでいた。

「……なんだ？」

枕にもたれるようにしていた彼は、面倒くさそうな面持ちでアンリエッタを見つめると、手元の本をパタンと閉じる。

アンリエッタは思いきつて、寝室に身を滑り込ませ扉を閉めた。従僕が慌てた様子で扉を開けようとするのを背後に感じ、内鍵をかけて誰も入ってこられないようにする。

焦ったように扉が叩かれるのを聞きながら、アンリエッタはゆっくり寝台を振り返った。

「突然訪ねてきてしまって、申し訳ありません」

うなじが見えるほどに頭を下げると、アンリエッタの行動に驚いた顔をしていたオーランドは、すぐに不機嫌な面持ちになった。

「殊勝に謝るくらいならすぐに出て行け。会いたくないと伝えたはずだ」

鞭打つような声にひるみつつも、アンリエッタは勇気を振り絞って寝台に近づいた。

「殿下にお話がございます」

「おれはおまえと話することなどなにもない」

とりつく島もない答えだ。ひるんでは駄目とアンリエッタは気持ちを強く持とうとする。

「あの、殿下はここ一年ほど、朝議などにお顔を出していないとお聞きました」

「だから？」

「……朝議は、この国の方々にとって特別なものだと聞いています。殿下も、きちんとお出になられたほうがいいのではないかと」

「異国の人間のくせに、我が国の慣習のことでおれに説教をする気か？」

アンリエッタは夜着の裾をぎゅつと握って、震え出しそうになるのを懸命にこらえた。

「……確かに、わたしはこの国の者ではありません。けれどこの国に嫁いで、あなたの妃となりました。ですからわたしはもう、ディーシアルの人間だと思っております」

アンリエッタの真摯な言葉に、なにか感じるものがあつたのだろうか。オーランドはふと真顔になると、アンリエッタの緑の瞳を探るように見つめてくる。

突然の視線に思わず身体を硬くすると、オーランドはすぐに眉を寄せて、ふいっと視線を逸らしてしまった。

「それで？ 結局なにが言いたいんだ」

「その……明日の朝議は、ぜひ殿下とご一緒したいと思って。お願いに参りました」

ただ朝議に出てほしいというより、一緒に行きたいと言ったほうがまだ受け入れてもらえるのではないかと思ったのだが、オーランドは鼻で笑うだけだ。

しかし、突然なにかに気づいたように、オーランドが鋭くこちらを見つめてくる。

その視線に思わず目を逸らすと、オーランドは手元の本を投げ出して寝台から下りた。

そのまま大股で近寄ってこられて、アンリエッタは反射的に後ずさる。

「で、殿下？」

「なにを隠している？」

頭ひとつ分も背の高い彼からじっと見下ろされて、アンリエッタはたじろいだ。

「か、隠してなど……」

「とぼけるな。いきなり朝議に誘ってくるなどおかしいだろう。——誰かに頼まれたか？」

ぎくり、と身体が強張るのを止めることができない。それを見てオーランドはますます眉間の皺を深めた。

「どうなんだ」

「そ、の……王妃様に、お願いされて」

剣呑な雰囲気にならず、アンリエッタは正直に答えてしまう。

だがこれが間違いだっただようで、オーランドの紫の瞳にぎらりと凶悪な光が差した。

それに息を呑みながら、アンリエッタは慌てて言葉を重ねる。

「で、でも朝議に出ていただきたい気持ちはわたしも同じです。国政の場にはきちんと臨まない」と――

「だからこうしてやってきたと？ 昨日のおれの言葉も忘れて？ その上で自分の価値観を押しつけようとは、たいしたものだな」

「あっ……！」

強い力で肩を掴まれ、既視感にアンリエッタは真っ青になる。とつさに足を踏ん張ってこらえようとすが、男の力の前にはまるで敵わなかった。

「い、いや……、きやう！」

あえなく寝台に突き飛ばされ、恐怖と焦りに冷や汗が滲む。すぐに逃げだそうとするが、敷布の上に押さえつけられ身動きが取れなくなった。

昨夜とまったく同じ状況に、抑え込んでいた恐怖が一気に膨れ上がる。

潤んだ瞳を見開いたまま震え出したアンリエッタを見下ろし、オーランドは酷薄に笑った。

「そんなに言うなら、朝議に顔を出してやってもいいぞ」

「え……っ」

「ただし、おれの言うことをすべて聞くことができたらだ」